

奥村鶴吉とICDの起源

森 山 徳 長

(1) はしがき

ICDJS国際理事佐藤吉則先生および常任理事隅田百登子先生のご依頼により、本誌に敬蒙的記事をとのことで、標題を一体何にするかと思案して見た。結果はこれ以外のふさわしい題は無いと考えた次第である。

それは私の歯科医としての経歴、またICDとの関わりと密接に関係がある。

私は1928（昭和3）年、東京は隅田川の東、墨田区江東橋で開業歯科医の長男として生れた。

地元の小学校、次いで府立三中（現両国高校）を経て、1940（昭和20）年東京歯科大学専門学校に入学。1945年3月に卒業して、直ちに東京歯科大学江生細菌学教室（主任 奥村鶴吉学長）の研究生となった。

翌1946年4月より助手として東京歯科大学微生物学教室（講座主任 米澤和一教授）に入室して助手になった。1930年4月、専任講師に任命され、細菌学者として研究にはげんだ。

ところが1930年末になって、父が急逝し、止むなく大学を退職、父の医院を継承した。以後、教室は非常勤講師となった。

(2) I.C.D.共同創設者オトフィと奥村鶴吉

この2人の関係は、高山紀斎～東京歯科大学の長い歴史にかかわって来る。高山一血脇一奥村の関係を簡略化すれば、1920年秋東京で奥村主催で持たれた「オトフィ歓迎晩餐会」に盡きる。

この夜の話し合いが後にI.C.D.設立の引き金となったというのが、本文の話のあらすじである。

第二次世界大戦前のI.C.D.は、アメリカ合衆国が第一部会で、役員数、会員数もずば抜けて多かったが、I～Ⅷ、XX（全世界計14部会）は、第I部会主体として運営されて来た。

しかし最近ではアメリカ部会が兼務して束た、全部会の事務局と仕事を2分して、全世界の統括を行なうこととなり、昨年末にそれが実現した。

そこで奥村の所遇を如何に（フェローかマスターかどちらに）するかという問題が真剣に検討された。奥村の弟子と、自他共に認知されている小生のもとにも、前々・前・現本部事務局長や、国際会長らから何回も事実の確定を求めるメールが舞い込み、小生を苦しめる？こととなった。

私の知る限りでは戦前に奥村がマスター称号を授与されていたという確証（文書）は無い。稲毛の東歯大図書館に何遍も足を運んだが——無い。

何分にも、前大戦前後の時期の事でもあるので、確認は、正直なところ、未だできていない。

兩名ともに、逝去後半世紀以上経っているのに未解決で残念なことである。

(3) 国際歯科学士会は、どこで、どうやって始まったか？

1) Louis Ottofy (1860-1939)

ハンガリ生まれ、5カ国語を話した。一家で米国移民し、Chicago CollegeのDental Surgeryの保存学教授。のち学長。万国歯科医学会で高山紀斎の演舌を聞き、日本東洋に関心を抱く。Dental Journalの共同編集者でもあった。1998年月横浜開業。（高山歯科医学院へ教授職を求めたが、経済的理由でことわられる。）日本の歯科事情を米国雑誌に投稿。

2年後マニラに移り、開業し20年滞在。ここでは成功して、マニラ大学に歯学部を創設。米国雑誌に報告する。

老齢となり1920年に帰国途次東京に数ヶ月滞在。米国雑誌投稿。

奥村鶴吉（TDC学盟発後のオトフィ歓迎晩餐会を

開催——ICDのアイデアを語り合う。1926年フィラデルフィアで第6回万国歯科医学会で、奥村・向井らと再会してICDの具体化を話し合う。

1928年7月8日オトフィ ICD法人化を完成。

(4) まとめ

そもそもI.C.D.——国際歯科学士会——の始まりは、高山紀齋がシカゴの万国博覧会で、日本からの招待講演者として日本・東洋の歯科事情を話したことに始まる。

これを聞いたオトフィは、東洋探訪を決意した。

高山歯科医学院教授を希望したが果せず、止むなく横浜で開業した。

2年後、米西戦争の結果米領となったフィリピンに渡り、今度は成功し、マニラ大学歯学部を創設するなど、その夢を実現出来て、米国の諸雑誌に記録を残すことが出来た。

高山の後継者血脇守之助（東京歯科医学院）は、奥村鶴吉をペンシルバニア大歯学部に留学させ（1902-1904）、帰国後学監に任命し、専門学校令による東京歯科医学専門学校を設立した。1945年終戦の年旧制東京歯科大学となる。
